

サムエル記下 13 章 23～39 節

2025 年 9 月 24 日(水)

はじめに

本日は前回の続きです。ダビデの長男アムノンが異母姉妹タマルを凌辱したという事件を起こしました。それを受けて、本日の 13 章 23～39 節は、タマルの兄アブサロムが異母兄弟のアムノンを殺害して復讐したという記事です。ダビデ王家内の骨肉の争いです。

I サムエル記下 13 章 23～39 節の話の流れ。

さてサムエル記下 13 章 23～39 節の話の流れを展望してみましょう。ここは、まず 13 章 23 節の「それから二年たった」から始まっています。この二年はどういう二年間だったのでしょうか。アブサロムがアムノンを憎悪していましたから、それが具体的に復讐へと熟す期間です。その間、父王ダビデに公平な裁きを願ったのかもしれませんが、そのようなことは書いてありません。おそらくアブサロムがダビデに訴えても無駄であったか、あるいは、最初からアブサロムはダビデによる公平な裁きを期待していなかったか、のどちらかでしょう。

さてアブサロムによる復讐劇は、アブサロムがエフライムに接するバアル・ハツオルで、自分の羊たちの毛を刈るという行事から始まります。これは祝宴の伴う行事でした。この祝宴にアブサロムは、王子全員を招待したわけです。王子はダビデの子供たちですから、以下のような者たちがいました。

1. サムエル記上 3 章 2～5 節 ヘブロンで生まれたダビデの子供たち

- ①長男アムノン：母イズレエル人アヒノアム
- ②次男キルアブ：母カルメル人ナバルの妻アビガイル
- ③三男アブサロム：母ゲシュル人の王タルマイの娘マアカ
- ④四男アドニヤ：母ハギト
- ⑤五男シェファトヤ：母アビタル
- ⑥六男イトレアム：母ダビデの妻エグラ

以上 6 名です。尚、アムノンが凌辱したタマルは、アブサロムの妹でした。

2. サムエル記下 5 章 13～15 節 エルサレムで生まれたダビデの子供たち

- ①シャムア、②ショバブ、③ナタン、④ソロモン、⑤イブハル、⑥エリシュア、⑦ネフェグ、⑧ヤフィア、⑨エリシャマ、⑩エルヤダ、⑪エリフェト、以上 11 名。

こちらの記事には、母親の名前が記されていません。それは、ダビデが「エルサレムでも妻をめとり、側女を置いた」とあるとおり、ダビデ王の後宮に住まっている女性たちであり集合的に捉えているからでしょう。また「息子や娘が生まれた」とあるため、上の 11 名は王子と王女を含むかもしれませんが、聖書では通常男子の名前を書きますので王子たちでしょう。とにかくダビデの王子たちは合計で 17 名となります。アブサロムは、これらの王子たち全員を羊の毛を刈る行事に招待したわけです。

さらにアブサロムは父王ダビデの所に行き招待しています。これは、アブサロムが羊の毛刈りに王子たちを招待するという計画を王に告げるためでしょう。この時、「王御自身、家臣を率いて」参加するようにと願ったわけです。しかしダビデはそれを辞退します。「お前の重荷になってはいけない」という理由からです。羊の毛を刈る祝いの宴には、沢山の酒食が用意されるものだからで

す。けれども「**アブサロムは懇願したが、ダビデは出かけることを望まなかった**」とありますから、王の辞退の理由は、「重荷になってはいけない」ということだけではなさそうです。

そこでアブサロムは、兄アムノンの参加を父王ダビデに求めています。これは、ダビデの許可なしにアムノンは行動できない状況にあったと思われます。タマル凌辱事件以後、ダビデはアムノンを謹慎処分にしないにせよ、自重を求めていたのかもしれませんが。とにかくアブサロムは、ダビデが参加しないのであれば、その代理として長男アムノンの参加を懇願したわけです。

この時、父王ダビデは「**なぜアムノンを同行させるのか**」とアブサロムに問うています。それは、アブサロムが、タマルを凌辱したアムノンを憎んでいたことを知っていたことを示しています。憎んでいたのに祝宴に招待することに奇異の念を抱いたのでしょう。しかしダビデは、そこで留まるのです。もう一步踏み込んで、アブサロムに理由を尋ねていません。ダビデは、アブサロムの憎悪がすでに殺意に代わっていることに気づかない様子なのです。こうしてアブサロムは、「**アムノンと王子全員を**」羊の毛刈りの祝いに連れていくことができたわけです。これは、もちろんアムノンに自分の殺意を悟られないようにするためです。

さてアブサロムは、アムノンが羊の毛刈りの祝いの席で酒に酔って上機嫌になったとき、自分の従者たちにアムノンを殺すようにと命じていました。こうして従者たちは、祝宴のさなか、アブサロムの合図によって、アムノンに襲いかかり、殺害したわけです。このため「**王子は全員立ってそれぞれのらばに乗り、逃げ出した**」のです。以上が、アムノン殺害事件です。

次の 30 節には不思議なことが書いてあります。「**王子がだれも帰り着かないうちに、アブサロムが王子を一人残らず打ち殺したという知らせがダビデに届いた**」というのです。一体誰が知らせたのか。何故、このような知らせをしたのか。よく分かりません。聖書の註解者の中には、ダビデの王宮には、アブサロムがそのようなことをしでかす可能性があるという暗い空気があったのではないかといっています。果たしてそのようにいってよいのか分かりません。

ただ王宮には、タマル凌辱事件を起こしたアムノンに対する父王ダビデの対応が十分なものではないという空気があったのではないのでしょうか。したがってまたそこからアブサロムが何か仕出かすかもしれぬという暗い空気はあったのでしょうか。それが王子全員殺害という噂となったのではないのでしょうか。とにかく 31 節をみると、事実確認をする前に、ダビデは立ち上がって「**衣を裂き、地面に身を投げ出した**」というのです。家臣たち全員も、衣を裂き、ダビデの側に立っています。

その中でダビデの兄弟シムアの子ヨナダブは、32～34 節で次のように断定しています。それを箇条書きにします。

- ①王子たちは皆殺しになってはいない。
- ②殺されたのはアムノンの一人である。
- ③アブサロムは、タマル凌辱事件の後、ずっとアムノン殺害を心に決めていた。
- ④だから王子皆殺しという噂を信じるな。

このヨナダブの助言は、正しいのです。しかしヨナダブが、このように言うことができたのは、何故でしょうか。それは、もともと彼がアムノンに仮病を使ってタマルを見舞いに来させるという悪知恵を与えたからです。その悪知恵がタマル凌辱事件を引き起こし、さらにアムノン殺害事件を

起こしたわけです。

「**アブサロムは逃亡した**」とあります。ですからダビデ王の継承者は、第 1 位の長男アムノンと第 3 位の三男アブサロムが排除されたことになります。そうして見ると、ヨナダブは王位継承を狙うという野心をもっているとは言えないまでも、王位継承に混乱をもたらしたのであって、ダビデ王朝にダメージを与えているということはいえます。

さてダビデ王と家臣たちが、混乱していると、果たしてヨナダブが断言したように、王子たちが帰ってきたわけです。王子たちは到着すると、「**声を上げて泣き、王も家臣も皆、激しく泣いた**」のです。

他方、逃亡したアブサロムは、北部のゲシュルの王アミフドの子タルマイのもとに行きました。彼の母マアカの故郷なのです。アブサロムは、そのゲシュルで 3 年間を過ごします。

この間、ダビデ王は、アムノンの死を受け入れ、長男である彼をあきらめます。そして何と、アブサロムを求めるようになるのです。

以上のことを箇条書きにすると、次のようになります。

第一部、23～27 節 アブサロム、羊の毛刈りに王子を招待する。

第二部、28～29 節 アブサロム、アムノンを殺害する

第三部、30～36 節 ダビデの王宮の混乱と他の王子たちの帰還

第四部、37～39 節 逃亡したアブサロムとダビデ、

Ⅱ. サムエル記下 13 章 23～39 節の解説

【1～2 節】

1 節前半の「**それから二年たった**」とあります。すでに触れたようにこの「二年」間は、アブサロムのアムノンに対する憎悪が殺意に変わり、さらにそれが具体的に殺害計画を立てるのにかかった期間です。

アブサロムのアムノン殺害計画は、自分の羊の毛刈りの祝いに王子たちを招き、そこでアムノンを殺すということでした。

そこでアブサロムは、第一に、王子全員を羊の毛刈りの祝いに招待しています。羊の毛刈りは、羊毛を得て、それを売ることができるわけですから、一種の収穫です。ですから収穫祭と同じく、羊の毛刈りには、祝いが伴いました。この祝いの席に王子全員を招待したわけです。それは、アムノンを殺害するためのカモフラージュです。

第二に、アブサロムは父王ダビデも招待します。それは、アムノンを参加させるためでした。王が参加するなら、次いでにアムノンも参加するようということができますし、王が参加しないなら、アムノンを王の代理人として参加するようということができます。

そこですでに触れたように、この時、アムノンは父王ダビデの許可なしに行動できないという状況にあったようなのです。それは謹慎処分のためか、自重せよということか分かりません。ともかくアブサロムは、ダビデにアムノンの参加を求めました。ダビデは、羊の毛刈りの祝いの席に兄弟全員を招くというのなら、それは神に対する収穫感謝と喜びのときですから、アブサロムはアムノンに悪さをしないとと思ったのかもしれませんが。

この点、アムノンも、自分一人ではなく、他の王子たちも招待されていますので、アブサロムが自分に悪さをするとは思わなかったのでしょう。

こうしてアブサロムの目論見どおり、ダビデの王子 17 名がそろって、羊の毛刈りの祝いに参加したわけです。

しかし第三に、アブサロムは、自分の家来たちに、アムノン殺害の命令を下していました。それは祝いの席で、アムノンが「**酒に酔って上機嫌になったとき**」殺害するという命令です。つまりアムノンがすっかり警戒心を解いたときということです。アブサロムの従者は、彼の合図にしたがってアムノンに襲いかかり、殺害します。こうしてアブサロムは復讐を果たしたわけです。

【30～36 節】

アムノンが殺害される時、他の王子たちは、一瞬唖然としたことなのでしょうが、直ちに逃げ出しました。この時、聖書は「**らばに乗って**」と書いています。ラバは雄のロバと雌の馬の交配によって生まれる雑種です。ロバよりも体が大きく、馬よりも調教しやすいといわれます。しかし馬よりも早く走ることはできないわけです。こうした事情により、王子たちがエルサレムに着く前に、アブサロムが王子を皆殺しにしたという知らせが先に届いてしまうのです。知らせたのは、殺害現場からいち早く逃げた従者の一人であると思われます。しかし彼は、事件の成り行きを見届ける前に逃げ出して報告したわけですから、本当のことは分かりません。そうすると報告した従者には、アブサロムが王子皆殺しのようなことを仕出かす可能性があると思っていたということになります。この点、ダビデ王や家臣団も同じです。やはり、事実確認をする以前に、アブサロムによる王子皆殺しを信じたわけです。

そのような王宮の混乱の中であって、ヨナダブはこの事件について、アブサロムはアムノン一人を殺すだけであるといっています。すると彼の言うとおりに、王子たちは無事生還したわけです。ここで注目すべきは、ヨナダブが「**アブサロムは、妹タマルが辱めを受けたあの日以来、これを決めていた**」と述べていることです。彼は、アブサロムの憎悪が必ずアムノン殺害に至るということを知っていたわけです。公平な裁きが行われないうちに、私的な報復が起こります。この場合、ダビデには王として公平な裁きをする務めがありました。もちろん個人的には、ダビデはバト・シェバの事件によって自分が罪人であり、とても人を裁くようなことはできないと思っていたのかもしれませんが、しかしイスラエルの王の職務には公平な裁きの務めもあるのです。しかもダビデは預言者ナタンをとおして罪の赦しを宣言してもらっています。それにもかかわらず王の職務を遂行できないとは、罪の赦しの力が十分に届いていないということではいでしょうか。その意味で、やはり神の子イエス・キリストの十字架の死による罪の赦しが必要なのです。そこにおいてこそ、人は「罪人であるにもかかわらず義と認められる」という恵みを与えられるからです。またその恵みの中で託されている務めに与ることができるからです。

さて、他方、ヨナダブは、混乱する王宮をなだめることに成功しています。したがって彼は、王宮の中で存在感を増すわけです。

【37～39 節】

しかし聖書は、これ以上ヨナダブについて語らず、アブサロムとダビデについて語ります。アブサロムは母方の故郷のゲシュルに逃亡し、その王タルマイのもとに身を寄せます。当然、タルマイも、タマルの悲劇については承知しているわけです。アブサロムはそこに三年間、とどまります。

他方、ダビデ王は、長男アムノンを失い悲しみの中にあつたとはいえ、三年間のうちに彼を諄め、何と、アブサロムを求めるようになるのです。それは一体何故か、このことはやがて明らかになっていきます。